朝夷巡嶋記

第六編

巻二

へ13
704
27

門 遠
號 708
巻 27

明治三六年十月九日購求

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之二

東都　曲亭主人編輯

後輯第五十一

法筵の粉餅配
陰徳の倒應報

再題越中國婦負郡岩神の郷なる稲向判五郎宿所の朝夷三郎義秀が曩ふ義邦井平次の往方を索ねるとて加賀の小松の国とりもあるを立寄て七三は別れ〻ゝ二とせあまり処り来れど今幾年経く陸奥なる戦の国の地ふ伝へく義秀が今彼処ふあり義邦夫婦を拯ひ出して経任を討捕さる軍の勝負云云と風聞大くさゝやかれたゝそは彼人義を結びくる友達の為本意を遂さる大将副将の相伴れて直ふ鎌倉へ参るとも近日ふ音信さるまゝと思ふるものゝ〻なるとあ亦虚譚のるれなるあゝまゝ年ゝからやあゝとてあるよゝはゝと家の内のゝみる日くゝふ噂を考へるまつる千歳と

歴年までよ憑めゝとも甲斐ぞなきに苦樂哀懽聚散離合常なへ現夢の世の夢と
ゝとまで覚ぬ迷ひに果ゝなりける時は建仁三年六月七日この日判五が宿所ゆへ志き
佛事あるのあゝ鄰ゆ菩提所なる地蔵尊寺へ参るとてゆふまぐれ還るまで一日ホ宿ホ
在らぬ廣光が妻浅良井と根仗蓋平奴姐あるゝ火焼水汲ミ里配の餅搗く音間断
なく上を下と波取の外もなく堪くなき夏の日消ゝ立升る甑の湯氣ハ玉の汗かゝ
ぐ紀臺所低る傍ハ臺めちこちと配至せとまぐ盡ぬ數いくぐとまゝ餅も暑紀日
影も疲よゝ末の刻過ホけり浩外ハ稲向判五ハ年尚なる旅客の寓果ゝるを
伴ふく菅笠引提ゆり素ち頻りホ呼ぶる杵の音ハ電門よりさゝ覗紀そなきゝ餅ハ搗
終らぬ内ハ土旺前とくさのけハ暑熱も一トしを堪くなきゝ参るゆへ旁ハ声を浅良井
ゝやく宥つけく母屋の簾戸をのそぐゝく推ひら紀出迎へくゝ只今還らせあゝ秋宿ハ
なるゝまくる間きゝ二十里あまる路の程さゝそ疲労れのひけめやゝ女中達洗足の湯を

疾くと呼立ゝ判五ハ急ホ推禁め杏うち捨て措ハ涙ぬ隙なくほ忍し寺ハ遠紀
路ゆもゆくぬを水さハ日蔭の夏ゝ伝ハ今朝ハ雨ゆく塵埃も立ぜ風さへ吹ばゝくハ汗
ハ流さとゝるを紀家ホ人ゆゆゝるぐゝ没ハ立りの稀なれば三とせとゝくゝ假染の逗
留客なるゆへ外ゆ使ハ出ゝるの外仕事と呼ゝく許しゝゆゝしとのハを浅良井哀ゆ
勿体なゝと宜なる廣光が長紀病著癒りて稍旅ゝちもゆゝ洪恩ハなりのを況く
稚紀小三を孫のごく子のごく慈育のなる庇をゆゝ骨を折り身を粉ホ摧くも憂
とハせぬど物数なるぬ女子の甲斐なきゝとゝ鈍ゝとのゝゝゝれゝゝ問ゝ
伝なるかとゝゝ涙さゝ紀ゝ判五も共ゝ袂ゝく脸を汗ハ紛らゝて拭ひく後方を
見ゝ人ゝ孫の如く子のごくとのれてひつ紀ホゆゝ後ゝ支同ハ眼なるゝ涙けり小三ゝとのハ何
処ぞ田鶴ホも差ひゝぎやと問れて浅良井されゝとゝ小三ハ一三阿爺が鄰村ゝゝ所
要あり物ゝくゝとく俱ゝゝゝゝ又幼くさゝハ今の程添乳ゝなれて褊室ホとのゝ

判五郎領なくそは熟睡したるホそりーさるとのろりせび乳母ホハ衣の綻ひとり縫ふ暇ごろろべ一三ハ亦何ホの故ホ鄰村へ出たつらんと再び問ひされがどよ戸樫殿の家隷連の村巡りとろふとゆくけハ翌の程さらへも来ぬとろふ風聞あり然とて正しく沙汰いろ紀を鄰村まで尋ねく問定めんとて出ゆふ小三ハ跡追ふく共伯ホそ携へるそのまを忍く披つまて見れ多ハ呈も亦久しくもあらぬ程ホそと報れハ判五ハ頭を傾け戸樫殿の御内人の未ませるとのふ風聞ありとも今出来秋の比ろろぬをそハ村巡りの為めあらぐ朝夷殿ハ陸奥ゆくまふよろ紀功名云云とのふが実事であるんめハ吾倍ホ娣あるとさえも官府ざるまそや吹えくれらのとのたホさゆめハあん使まそのめべ紀欲呈より外ま伺ふとハ必ひ合せるうもるー去歳の秋三ぬしハ冠者の往方を索ん為奥のくんとそ起行のそのち信も吹えぐりしホとの春信太の郎常ふる馬艮標吉郎嗣忠とろふ和郎を冠者の使ホ立られく三ぬしも悲ふく主従

球舎しとふー元晴大人の実義親切芭姫ろのきふよりと巨細ま吹えーふぐも朝夷殿の事そそのそ比まで出るふーるそをちち歎ぜる友鶴がとのひりけそ涙うちかこすれも益ろ紀籠言ふる紀信太の没落冠者の尼難吹えー比ハとんふう劫労のそそ春ふら長閑紀乳色分えぐりーホ禍還ふ福とありーー此度の勝軍ホ多ひきハ五層もと鈍ーー紀ぞらぐふ切で弥生の比まそとの風声の吹えぐ悔ー紀とふふんゆとのひふ歎息ふけ多ぬ紀思ふを浅良井が浅くふ汲ぬ憾のふもふく深りふりとものひふふ殿の難で共伯ふ歎息の外ふりけりふ時まそも彼旅客ハ緑頬ふ尻をふけそ頭を垂れきを又ぬ紀彼の問甚ふふちち吹てかりーを浅良井ふ殺くん然ふく彼ハ何名の使ぞ誰ぞとり汲て欲むふのふまそ俟せおくゆんとのふふ判五ハ微笑ふく吾使ゆあらぐーー宝珠山ありふるふハ過ーーふ紀とふりふく苟且ふぐふ和ふく来れ三日ふ且吹ふふふふふ人ふふ日世ふふ御寺よりハ千町ふふふ出左衛門新渡田の清撃橋を渡ふ折ふふれいあふ社伎ホ石ふ秋ホ拾

入れて身を投んとしけれども置れも抱れ禁めてまづその情由を原ねるに舊里八
城後の寺泊のひとりむすこ貪くもわるい人の子に芋太郎といひしものとて地方をとこ彼
港の遊女とこの身をもち崩し親の勘當うけしより且くあちこちとこの岸に
始末を世うとる業もうたまの親しき友にも疎れてこの任ひもなりの任ひ當國
加々沢の浦とかの外伯父夫婦ありしかく尋ねくるよし伯父夫婦ハこの
春の時疫やくうちつづいて身まかりまさり素より伯父子のうれいなく村なる人の子と
名乗りなせしとかのうちうべ蹟ハ他人のうちぬうち歎くとものうちに子日ありとの舎義の死
さうとハ知らで辛ひとまくまこそ来るる悔しきさと腑を咥ども彼もうく又戻後還ん
と欲されども路費ハ喝くり死なまじ憂を為る涙ばかりとこそ決めしとるまじ放ち
涙と泣声小口説立る懺悔の趣皆とこの不便弥まして教訓しつ倩とこれ必べ時も
時今宵の佛夏小千萬僧小斉を薦め施物をまゐらせいくこの經を讀ませんとの人

一個の必死を拯はれしかるこの功德ハ如何とか尋思をしつ說曉しに汝ら雀里還るべきの
路費ハこれもかくもせん宿所ハ来まと後方の跟しに行くこの来れども庖湯の混雑又ハ身共
留守のうち向つて言のうるうるうて告るの眼ろり死とあるつるうしに說示せハ浅良井時く
つくとうんうるうるよ惜しくそハ死功德のうるゆりやるの人よりハ死人なるに遇ハるとう
けるハ命めでたく祥ろ死今のうるとこれどもこの舊里立ろり人をとうるの親達の勸解と
向後を慎ろ必と論せハ判五も小際を進やく嘴旅の人芋太とこれ途ろくのハつる
どくうるる死時の悔ハ誰もうるとこるねども色小迷ひ慾ろ引まく親子の愛を喪ひ
しハしうるもうるる不了簡親ハ憎しとうるるどもよ小懲艾の勘當より身の措外ハるぞ
きりしハ免さぬ天の咎めとかりハ怕れて過失を改るまとめるしるをハるぞふ
命を捨るぞ不孝のうるの大不孝死しくく地獄の呵責を受とも浮む瀬絶くるるべ
志を更やく故郷ろりて人がうるる人とるるうんと欲まる欲ろうぞ路費を取らべし

ちろはるかにうるおぼえと問れ辛太は小費をとりて縁の框に額をつけおのれ
るに慈悲洪恩何の時か忘るべきや宜しき御辭を捧ぐまつらんに鳥滸がましく
望みきたれば似られどもよりや路費を賜りて今舊里へかへりても親の怒を寛むべ
とぞ願ひける面ぶせに願はんは一年三ヶ月召使ひ給ふ木綿なりとも新しき衣被て
還らんとの為に常言ふ故郷へ錦なる大家に使れて辛防せしを家裏に勤辭
べ親の許へ申されば田を鋤き新樵り夜も日もうるさいと辛苦勤も厭ひ
とのふを判五は使ひ給へ者のよりは保人もなる旅
客をとどまらんに使きんやさぞ疲労く堪くらん今宵一宿留もせんそれ汝が後
方をとりて西の方なる角門を推せば庖湯に入るべし僮僕どもよりを言て
餅を飯まれさうべとを取るごとく情ある辭に辛太は感涙を拭ひ伏
拜して身を起さんとまる折から一三を小三を伴ひて来り判五をうち見て近寄

進まで檀那の御寺へ還らせ給ひし僕も先の徒を帰るべうもひとり
此一問合まるとうしあり鄰村へ赴きとの間に小三は框にまをうけ
まくやに阿父様なるに母さまに只今かへり侍りとのたまへば細骨の簾戸をひらき
常に住る小部屋のうへ走りゆくを淺良井やとぼあくとまで慌しかるべ其外開
そまちそおくとうの足踏鳴らして褊室なる幼くさまの目を覚しなと寝れて立ち
あづかる簾戸を闔てゆく年七ツ歌むまれた遊歌を稀なるを不樂しとのせば穉
児も寄食人とく大人の死呼ばるるを怜利なりのもと妻と目送る一三を判五はちらく
招れきく戸樞殿より村巡りの風聞ありしとうに空つ虚実なるを妻とのうるとを問へば
一三のうへ鄰村でも虚実はいざまるはるとかとの判五は沈吟して
らは人の風聞のうへの時なるを信ずしそのうへまれかるものを鄰の寺参りの人
さは必死の人を救ふうその故は如此とうそのうへ彼処をうと指さして示せば一三も

後方をふり顧嘆して其人を悲しみ形容やつれ羸れふり餓も労も表らす物さびしきと云て半屢に穿て先に立ち竈門の戸を引開て誘ひ出太郎八葉られて迷へる狗の人を見て尾を掉ごとく一三が後に跟随をなす庵渥のくふ赴花り浩処に外面に鉦うち鳴らす修行者の唱名の声ちりつくを判五公聞て驚き法捨せんと忙しく端ちかう立出るやうや噛くと告を頻りに鳴らしてはいれば出れも過さぬ修行者は衡門より進み入れば年は五十許歳背に細小なる網代造りの笈を肩に負ひ麻の腰衣を脛高に被なる帯に延座の鉦を著て右手に素樫の撞木を握り左手に菩提樹の珠数を繰て虎皮の遮日懸さり白拷の単衣に三衣の腕嚢脚絆も幾月幾日の風雨に曝されんその色ともいはまそよ彼田舎の毛衣の今一トしほ心湿さる況て日は焦埃染る旅痩の面影は身を野蕈の任しんこの一箇の尼法師奥の妙蔵に儔ふべき圓位の妻の果とおぼしくその容貌

うける當下浅良并に豫て用意の白米一盆と元祐銭三文ばかり添て出て取らせ三尼は項に掛ふり頭陀嚢の口を披なく受納めて外面に両三歩退なを母屋に向ひ鉦うち鳴らし只今志しの精霊菩提の為願以此功徳平等利益施一切菩提心應頂礼南無阿弥陀佛南無阿弥陀仏と幾遍か繰返しる廻向とともに鉦うちて徐ろと出ていんとする程に判五は遽て呼留め卒尓ひとこの遍て一トしきもそーとのりとも覚ず廻国の出家の果報を女儀出似げなく出よりも抖擻行脚を旨とし獨行をまのあたり就く今宵ちかぶ宿ん志を佛夜の法筵讀経は菩提所なく今朝は執行しかれども願は翌まで杖を駐めくる長廻向とのたまふ非時の饌をも進らまをしうけ引受と他夜なく請れて尼は一議に及ばず寔に推察せらるべく霊場霊地を拜んとて関の八州四国九州漏なく巡り〜程なく年来を歴されども北国はそぞ未だ旅ふ〜

芋太郎を
救ふ判五
行脚の尼と
とむらふ

廻向をこの月の勤とし給へば朽骨古墳あり今毎月其処を通夜をすること三又り況や由緒もありげなる施主の所望ゆゑ〳〵推辭べき様など学の寛忍の疎なれば六字の名號ある念の外更所作もなくとのふ判五ハ旅びて分ふ背門よりも遠く先さや草鞋を解ぬとあれば傷をもんなれば淺良井ハそのうるとゆをとらぶ案内し侍りてんとそこと外の出ずく南面の庭門なる折戸ひくを先ゆゑ敷待態ゑ行脚の尼ハ裡をゑ入まつく

さてもよれ〳〵位ひたたはるれ荐さをめと庭面より書院福室をんかうゑ迄三ハ背門のうこ廂引るゆゑもく程ゑ判五ハ衣を脱更へとそ納戸のくゑ勘ゑり有斯〳〵程ゑ庵温ゆ稍搗果〳〵餅の白飯法ひゑ汲流を覓涼〳〵ゑ水の音ゆ彫の音を揭ぬ〳〵く時ゑ程れ角鞋のさゑゑ長ゑ夏の日も下晡と[illegible]ゑ比及分面熾頂ゆ驟〳〵く戸樞殿の御内人十渡蹄馬速景ゆ〳〵の来ゆひゑと先走ゆ呼門声ゆ稍向の奴婢ゆハ慌忙ゑく或ゆるゆ報知ゑせ或ハ書院の塵掃拂ゆ根及莖莖

長ゆ笠帽ゑる間のゆゑゑ先を追〳〵蹄馬速景朱鞋の両刀野裳束脛卒四五名後〳〵く金門挾〳〵と苛めく〳〵ゑ玄関ゆ近つく程ゆ稍向判五ハ袴の紐を結ひあゑ出迎〳〵く式甚ゆ顔を衝れ某判五ハ称るゑ不時の御来臨ゑハ[illegible]ゑ及ぶゑ失敬御免とうら賠話て案内をれば十渡蹄馬ハ引れて書院の上座ゑる席ゆ著て威儀を繕ひ和殿ゑる〳〵判五とゑる里の総角牛撲童も百田の所命と奥微せども直を撮るゑ〳〵ゆ此度臨時の新出役下官十渡速景と以後ハ所要ゑ〳〵ゑ意せられると迄の口誼言葉ゑ〳〵女の童ゆゑ〳〵ゑ繰〳〵て運ぶ香煎匂ゆゆ座著の果子の花のゑ〳〵色香を誣て薦ゆけるゑ程ゆ朝鮮三郎義秀ハ曩ゆ諏訪嶺の山中ゆく〳〵ゑ徘々を射く驍〳〵金九郎ゆを罵懲〳〵ゑ〳〵俵ゆ立別れて岩神を投〳〵くゑ〳〵程ゆ既ゑ日子を驚ゑ〳〵ゑ日中の比及ゆ判五ゑ〳〵宿所ゆ著ゆけり折〳〵来客ありと云ひ〳〵く奴婢ゑ〳〵ゑ

立騒ぐ声ハ定メて呼門ども應をせざ用心七四下と云へ久くも庭門ハ閉たり案
内知るとなれハ四五十ケ所の金撮棒をいと軽やかに引提て進み入るに前面に見れば一個の
賓書院あり従者ハ縁頬に居なれ湯を飲み果子をもて啖ふ傍若無人の形勢
なるに判五ハ怕憤を隠行頭首をさりけるの婢のある体なるひくてありひしばるに其の
来由を問へとく揚櫨に芳宴を編まんくに遍邑の蔭に躍ひく且く容子を窺ひ
當下遠景容を更めをれ判五と呼ばれば應く膝を進めを佶と疾視て声を張り立
朝敵經任亡びをれども其の残黨離散して當國にあり汝ハ膽太くも曩
に經任の荷膽して竊に彼地の産物を川受て賣買し經任伏誅されぬるに
徴りもなく彼残黨なる瀬高駝忠二とのふ小賊をひく倉藏おけよ訴人あるく
露顕せんとれより駝忠二判五を搦捕くなんと仰られ戸樞厳の元下知に合ハ
定らく路もなく彼残賊を推出て其の身も共に縛をとく受と罵れば暇卒ハ十

ほを内へ左右ひとく詰よせ詰蒐返答遅しと責さりける以ひけるに兎屈の
外ふる判五いとく駭怕れて顔色忽地土のごとく小膝も声も戦しく御淀でいへども
然るおそれ罪科を犯せる覚絶てなれ怨あるりの誣言ふとひとのいはせも果ど
速景ハ呵々とうち笑ひこの期ふ及びく陳もるとも赦るべしとそ免さんや所詮論ハ
善悪ろり家捜しせよと下知をれハ兼ると應もあざ暇卒ハ齊一身を起して幾間
とおられ座舗の四隅背門よ庖湯と罵りく物諧散を狼藉よ奴婢ホいとく駭
騒だく隠れもの逃まよ周章たるぐりけり且しく暇卒ホハ芋太郎が襟上
攫く宙ふ吊しく引立ぬ貴子のほとりふ打伏せく椎と押へく動もざ速景ホ
うち對ひく十渡殿御覧せよ此奴庖湯の邊よをり。某ホをひく外面へ逃とし
為体他し奴婢ホよ事かりくきうるくひしくに矢庭ふ捕へく牽のて来れり
こハ必かの残賊ろる駝忠二よ元いかと報るふ判五ハきく呆れて苦しく胸を推鎮め

怨れ怒ること刀祢们も呼び召さんとその男子が某が身に係りくるりのふわりと越後より来つる旅客ゆく名は芋太郎とかの箇様ここのるふより溝壑橋の上を入水せんとしたる折某ちらと遇あらく特ふ不便ふあり引ぐるその死を禁めく意見を加え些の物を取せんとく嚮、宿所へかく来りしの一夜も留めしのるとを誰々ふも問せ給相違あるべうもいつぞとのつる芋太を跪ぎ只今わるのまうせしに某いとでろ経任が餘類なるどよひ記免させ給と哀報を速昂うちんと冷笑ふ扱ちこり拵う脊を創骨を摧くまでぶ責懲さぜべうふと情の実を吐出さべきこと縛ゆく打悩さぜもと烈記下知ふ覇卒们ひとく応く用意の早縄を繰もあぜ芋太郎を先くと縛めく背をいく打懲せば芋太は若痛ふ堪ざりけん泡ぐび声を絞り立くやと上ひんん且く笞を放ゑとのつる覇兵はまをとめく赦らべやせと引起せば芋太は吻と息をつ記今は恩むようもるー御推察ふ違ふとるく芋太郎とは假名ゆ某実は駝忠三郎経任滅亡ーより身の措処るるまくふ當國ふ逃れ来つ稲向判五はこの年来経任一味ののるれば由を生母を寓く舎藏まとてをひひーくと

いつる判五は瞻を決して出つぞも仰さるる輾くとせーまを突立く膝組直ー眼を睜りこの癖者奴何ぞいつるれは汝が素性をあらぐぞ又彼人水の趣を偽へとはいひもけ拯物こそせんとて拒ぐ恩の員ふ誣言は過世の讐欲現世の敵欲ぞ憎ー腹たーいつるまぞと敦圉ども駝忠三騒く気色もるく百田の阿爺よりくまぞ綽蔑覚れは術もるー勅の詩ぞ苛ぐ記呵責ふあんとり経任一味の舊縁あれば舎藏ふりとまふぞやとはいまぞ判五は怒ふ勝ぞ又ーも癖者奴が偽言も変ふぞうん怨ぐあは いひもせぐるるるのるとのくびとを助けらぐ記命ふあらぐぞも誣ふ扱偽るやと罵りるぐとり衝よせく獲者人とーとけるを覇卒ふ透ぐぞ推隔て判五を礫と打退け犯人ふを首伏ーるふとの罪を追れんとて淨ひ偽る大膽不敵汝をも亦縛めく打懲ぐぞば

支果に覚期をせよと罵りて索を被んと立ちりを速景急に推禁めやとれ
判五と呼立て傍に招く声を潜に駝忠三既に首伏さくれば陳ずくうとも罪は
逭れざかれば駝忠三のろ共りその身はさらべ妻子眷属悉皆捕捕て戸桎殿へ
牽りて糸ぶんとれい号ぶ職役の當に拷ぶべとろろ者れども稲向氏は當郡
一の舊家ゆて鎌倉殿も知召れ世く相續の庄官ろくぶぞ只責得の利に
惑て經任一味の風声ありとも渠に與く友逆の弓を弯るよりは咎えぎさり
とも駝忠三を舎蔵くる罪軽かぬをとりうぶ役義に離をそのく彼癖者と
路次に縊りて和殿ぶ陳まるよりを取らんその身のきうは妻奴子まぐ連係の坐を逃
れん漢土の常言ゆも千金の子は市に死るぶとのよとあるをいひぞやされば古歌に
山吹の花色ろもぬーや誰とぶど苔もくちるーふちく彼駝忠三ぶる結果るぶ
同へど苔も死人ふくちるーもるる方便は山吹の色をんまるふまたのるーもろる

ふりもと懇態に情をうけ謎くは慾の限りの賄賂所望と解せんるの縛索要
時放ーて耳元より判五はのるーー事情を知れども卓に応ぶ嫌を病ぐ沈吟
やう屈くれ頭を擡ひうけるれ親切ぶどろより願ふともひくかぶ死半なれども某
素より逆賊に交参ると絶るーー況彼半太郎を經任ぶ殘党ぶる駝忠三ぶり
とは夢ゆもぶらぶぞの偽りの入水を救くーー要時宿所に休はせーーん智ゆを蒙らぶ。
今更ふせんすぶるーー嫌を彼癖者ぶ誣言に怕害れ竊に路次ぶ縊らーーく埋の
ぶ者ひとまるとれいこれ偽りを行ふそのるー再くあるふるぶ究屈ゆ実の罪とるくん。
この義は許させのるーーと推辞を速景推ーくく和殿の遠慮は律儀過ぶる只管
我意を立んとそのるはさーん妻奴子ぶ獄舎の中に命を隕さぶ緞萬金の貯禄
ありとも和殿ぶ児孫の有ふあらぶ事ゆまぶく方便あり武略とのゆも絶の計
るるを為らぶ某に任されるは戸桎殿へ密ぶに黄金一箱を進らまぶ文ぶそ

家つる賜卒四名と國方ふをる同僚仲間一小包に贈らん欲これも合せく一箱
ゐるべし其ハ只この舊家の斷絶を憐むのと所得のヨヌ寡人貴意あらん一切
貪るまろ〳〵かれば今費たるところ二三千金を過ぎ枉てこの議ふ隨ひ給へと
辭せ〳〵く說勸るを判五ハ聽ぬ頭を掉りく〳〵論じ〳〵已ざれば速景怒の
色見えく立あがりんとする程に陳亮の陰に竊聞のあり忽地に声をかけく
十渡の大人等せの人僕主人ふまり代りく御内意に後ひまつりん且く其然
とゐと先紙門をそとく顯れ出るをきられば是別人るゝぞ庄司曙の一三なり
速景ハ今漸くま扱めてあるを見ども怒気をきゝ〳〵ば応もせず衝と身を
起しく舊の席に立ちくるまと坐を気色騒ぬ一三ハをれ推携く
速景ふうら對ひもぐ見参ふ入らざりけるを不審〳〵く思ひ召れん僕ハ當家の
食客曙の一三とゐ〳〵りのん庫の鍵を預けられ〳〵老僕代ふひべ。さる儲ハ
ともあれ盃を勸んとおりの田舍のを細料理緋果敢ぬその間はあん疑ひの
まちありとくあるに判五ハ不慮の厄難さりとて犯せる罪るゝぬに只の癖者恥忠
とゐ〳〵ん片言とのこゝ〳〵吾れらぞむどれを讃ひのあべきとゝ〳〵ゐるぞ只顧虎実の勘
問を願ひ給へ〳〵ゐふ薄少られども當坐の進物目録に載て用意やり御受納あべ
一家の事ひとのくあ〳〵と懷よりとり出せ目録を恭く差よに是ハ速景面を和げく
原来御邊ハ出納の財布尾を受る老僕代の一三とるゐ〳〵く趣忠り義ぞされば
とと今袖の下るる贈りの受くるれども長途を労ふ為の郷食膳代といふ〳〵とそれ
ゐ推辭べ人情をゐ〳〵ぬのよ似ゐべ定めく心を用ひられる包の數もヨヌ〳〵ゐ
内見とりあげとうち披く一通ハ目録きゝぬ經任の四天王と呼まとる鐵盾
矢藤五重連が骨相書ゆくありけまべ是ハとゐり速景ハまりハぞ繪圖をとり
落とと周章さとと一三ハ隱し持る一口の短刀を横佩詰よせて淺ゐ〳〵ゐ

速景を看破しく一三厄を釋く

矢藤五景義は経任が亡びしより汝は脱れて絶て往方の者とぞ聞ぬ骨相書を
りくこの地まで徇伺へく索らる天羅の中はあるべく虎狼の野心を改めず戸樞殿の
御内人十渡蹄馬速景と偽り名告く同類を相従へその一人を越後の旅客平太郎
とのの假名さて入水まとせ入龍せそれを媒鳥まあるべを欺れ必ずのまるは脅しく
許多の金を劫奪んと巧みしとの不敵さよ汝が来る初より主従の物のひざを北國の
人と似ず且穿鑿まとせく三千金の賄賂を貪りんとせ為体あるべきも覚
ねばなくもムつくまーありく戸樞殿より徇られくるその骨相書をうち披たる物の
蔭より合しとんくるの眼上は黒子あり額の外は金瘡の跡あるまで一点違なば原来
鐵肩矢藤五なりと既はん極めくりけるべの難義は救ん易しとぞくるはも
彼処はより時宜をそりて伎倆の裏をかくん顕しくるるはあるも捕るの用意あり
あるべは數代の庄官はく帯刀さえは許されるは騙略はあるべ苗字の瑕瑾なるは他

綱の浮浪人生れるべしの百姓でも世はの野夫中も功の者逃るとく脱るを一個くは
実の名を告くとくは推並び索は被れと老人の岌を攬る鋭は擬勢は到共
夢の覚くるべく驚義く後方は措る中力まは撥取く先愚るも一三は擬勢を
資ひと詰はせり騙竊覈計の悪根は事の露顕はあるは怯るく逃足を踏む
そは中は矢藤五顔の色赧くるり又蒼くるるまで睨詰くる遂恨の晴光を又は
立さる伝は要時応もせざりけるされども不敵の癖者れば必ずくく些も驚がど
あるくは左右をえくりく通一三好眼力知られくるべ名告るは及ばど景義は経任をん
くぎりて獨立の思ひを起一今茲三月の下濟平泉を立退く後は人時の至るを
まるこの重連を汝は搦捕んと聞くを龍の腮は脣く珠を蛙の寵は彷彿
又思るは力で勝んとく財庫へ案内をるくわん限りを遞与さばより異議は及ば
鑿ゆーと里の雛狗を肥しとれん覚期をせと罵りて刀の靭はまを掛るべ一三

透さず衝と寄せく臂を禁めく刀を抜せず人々出よと呼るゝ次の間の集合
る根仗並平真先より其の他の僮僕荘客何の程ふ一二ゞ暗躰を俟たる用
意の器械桿棒連枷引提く隔亮の蔭より羣と走り出て擊んと競ひ寄めく
しやと矢藤五ゞ挑と戦刃の稲妻なるを怯せず悪棍ホも矢藤五ホ気を引立れ
衆皆刀を抜つれく咄と嘩く蒐向ふその隙り駿忠三ハ尻も結ゞ絶計の縛の索
引解く跳蒐て一箇の小厨の合を引捍棒奪取り暇計の悪棍ホ共ゝ嘩叫で
矢藤五を援ひ頻りホ戦さりゝ暇るゝめ〻一三ハ有ゝ判五を背ホ立て
声を揚ゝ賊徒ハ絶ゝ六人有ホ輸あくゝ逃れども武備ホ疎ゝ荘客角組む
並平根仗ホも殺立られく蔑と退く透を窺ゝと矢藤五ハ奥庫索を走り
こちの障子紙門を蹴ゝ破らくる勢ひゆく四下を排て拄るめハ有りけりこのとゝ
まで義秀ハ雑色の蔭ゝ窺窺をり既ホ荘客ホ足るゝ取次ゝ殺立ら

きく加ふべくもえぞれが義秀今ハ悩ゝて書院の庭ゝあらゝ玉天罰知ゝ残
賊共白昼ホ引剥ゝて荘客ホを屠らんとり汝が頭の用心せゝ神明仏院ハ目ゝ先
ぞとも朝夷三郎が嚮ゝ有ゝ其処ゝ退ゝと罵る声ハ迅雷ホ異ら
ぞ身ハ飛鳥の影より速く肉ゝと登る縁頰ゝ金棍棒を取延て右ゝ左ゝ擊
仆せハ逃んとゝる悪棍両人肩尖頭顱を砕れく苦とものゝ死ん〻ぐけり賊る
三箇の悪棍ハ逃ひ〻ける義秀が名告るゝ駭き本事ホ怕れてゝ抑ゝ
降る欺又口地より涌る欺と罵り騒げど活路を索る暇るゝ〻已ゝを
沼ぞ力を勤ゝく殺脱んとゝけるを義秀ゝ引つけく先ゝ進ゝ駿忠三ぞ
捍棒蔑矢と打折く怯むを透さず左ゝ足ゝ胴で磯ゝ投蔑れハ後ゝ
進む両人ハ象棋倒ゝ擊倒されく三人齊一春蟲ぞ〻起んとるを起ゝも
そぞのゝ〻ゝく碓と擊鬼神不測の力量剽技貢子の下桁ゝ折る

まで殊さら冴える棒の様に人いらで堪るべき累り倒まで三箇の賊背骨肋骨撃断離らまく六段ふるうく死でゝり。

後輯第五十二

後花の十四松
涙種の一節籠

當下判五一三ホいとひとひらけざりしかる危弱の折ふしに義秀がかゝり来く瞬間に小賊を一箇も漏らさず撃殺るその綽のある体に且驚死且懽びく。餓鬼の地獄に寓るごとく海月の筋骨にあくるごとく両人ひとしく声をうけて。朝夷ぬし朝夷ぬし別後の情ハ今こそ述んとするに暇ゆ騙窃の猾長矢藤五目今奥のくに遇さり逃りやきけんもゞつるゝしとのみに義秀領くのミ応もあゞ血に塗れる金棍棒を引提さくひとり鐵脣矢藤五を其首に長首と索りさる程に矢藤五ハ群立挑む荘客ホをも下の悪棍ようち任しくるに

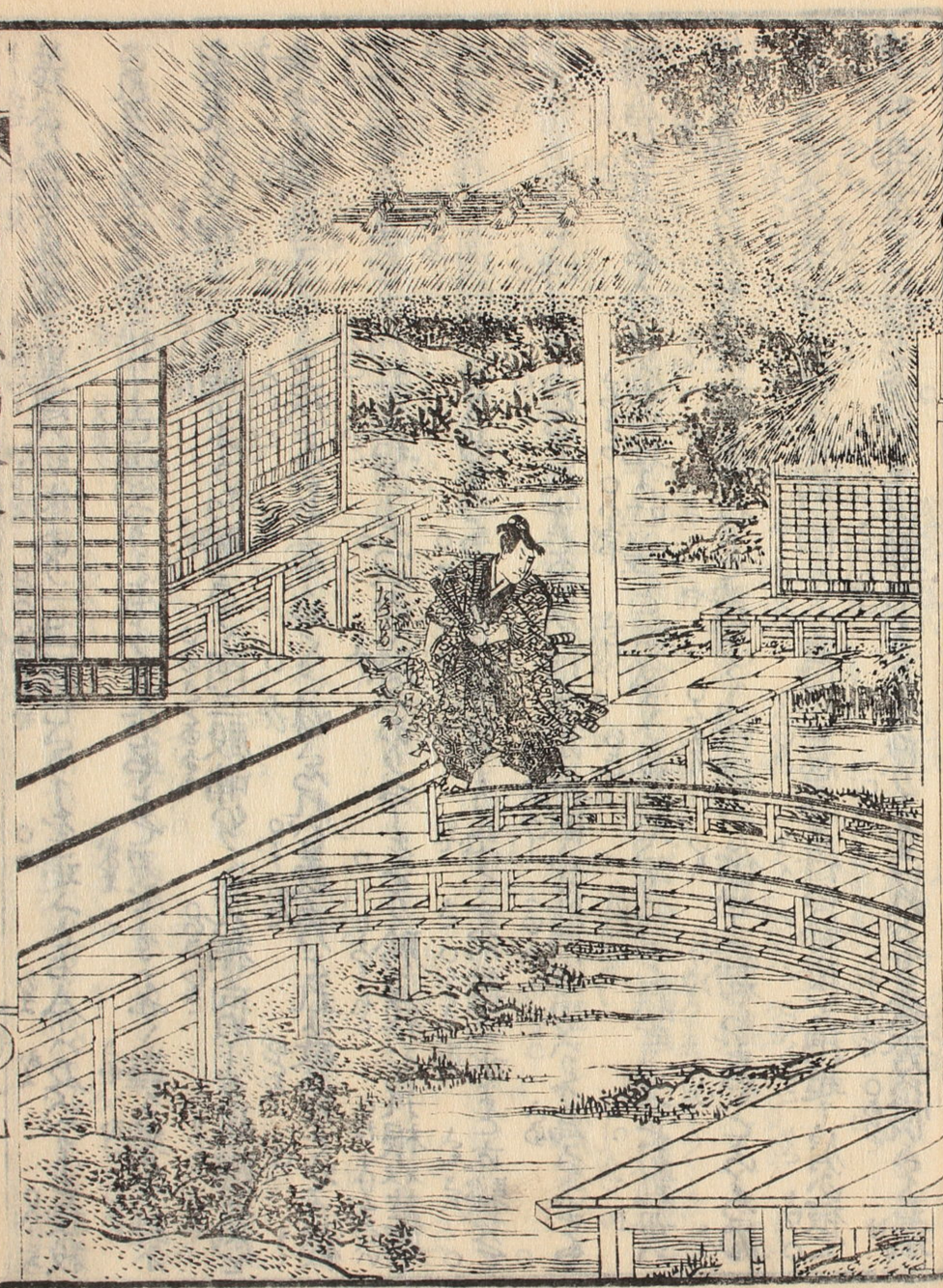
奥まりくる財庫を索くひとりもく程に忽地後方に猛者あり朝夷と名告る声器械の音烈しく咬えく正しくまた下の甲乙が叫び倒る声〻七けれゞ駭慌てうくせゞつゞ等類ハ一箇も遺らゞそ朝夷に撃れうこハ朽惜とゝくどるかくまでに為損じハ勝を取るとかくるゞくと尋思を考て背門より出て脱れ去んとする程に麦ゝとまゞくゞくゞ義秀既に追懸来つ重連蓬〻何処へ汝ゆもホこの棒を喫さゞ安ハ久ゞ駐れやいと呼りくる声に久ゞる矢藤五ハ戦んとする擬勢もるく庭より出んと編室る隔亮を撲地と蹴披けゞくるハ稚児を抱きくる妙母ひとりをり先より書院客房の戦ひよゞどろゞ怕れく龍ゞ息もせぎ〻に今ゞりハゞも矢藤五が矢庭に衝て入りくゞ你母ハ吐嗟と駭ゞ叫ぶを矢藤五仇とハくりく麦蒐て奪児を畧んとするを取せ〻とく携るを丁と蹴返ゞ你母ハ膳をいく撲れく叫苦とゞりの仰反くり程もゆゞせゞ義秀ハ四とり近く追蒐来

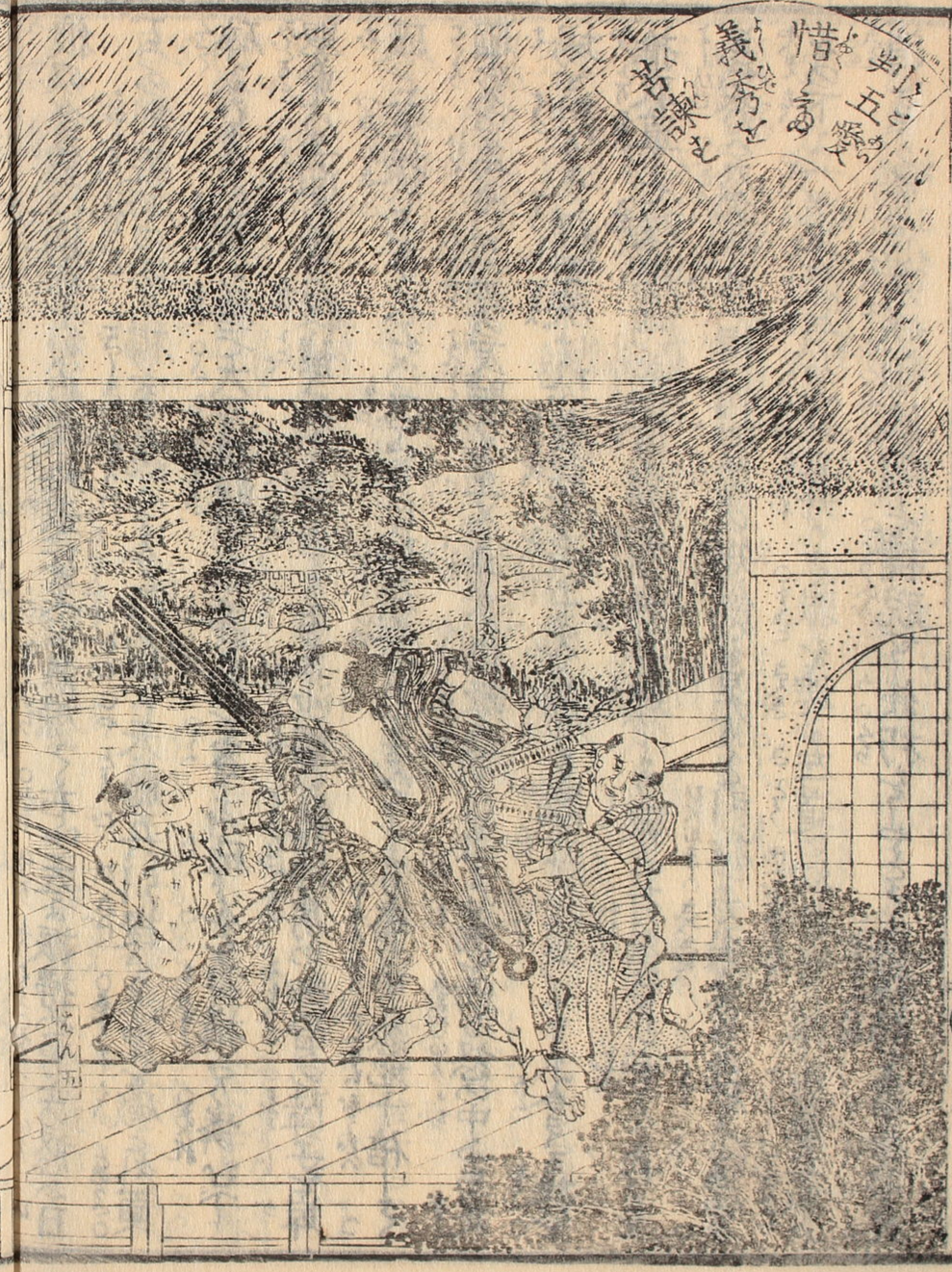
とうれば既ふ矢藤五が絶るぞうふ泣く嬰児を揺撫を質ふ捕く鰐張立る縁
頬とり捲り負る声を嫌り立朝夷且く其外ふ留れ汝萬夫の勇ありとも近つぶ
この小児を屠らんさでも進むや撃んとまる欲いつみくと呼れば義秀うちうて冷笑ひ
無慙なり殘賊奴ぞ追詰られく苦しに隨ふ數ゆも足らぬ小児を奪ゆ保質ふ
あくりともつれぞくふぞ汝を免さん觀念せよと罵りさくんや近つらんとまる程ふ頻りよ
うち泣く孫のこゑよ身の危をも忘れる判五八一三のろ共ふ慌惑ひく走り来つやよ
朝夷ぬ一等ゆあの嬰児ふ去山城の秋友鶴が産くりしふ人ぞ初子なるゆめを
暴立てり殺されぞ後悔其外ふ立くて彼よく孫を返せとるぞ追ぞよ逃
ゆくーと勸解ふ袂ふとり携まぞ一三も亦推禁めぞ阿三殿さのこゑ早りのこゑ百田の
ぬーぞこの月ろ憂ゆもぞひろえ負ふ慈ゆこゑふ初孫ふ怪我ーもあぞ共侶小王緒も絶
ゆぞうえまぞ退ぞく後よを尋思もゆふめと諫るを義秀聽ぞ頭をうち掉り迷

へるゆ公羽逆義秀ゆりとを木石ゆれぞ子を憎しとゆよゆれど重連ふ賊の
殘黨大辟不赦の罪人ぞされぞを官府ゆうらくも徇知されて搦捕れよと下知
せれふ因心愛ふ羈されて阿容くとて這奴を返さぞ今さ何を役義ゆを
後月の咎をひ鮮ゆふを加之義秀すを愛ふ溺れて逆賊を沼撃ぞ紀と世の
人ふうーゆ指をさられるぞ里要の衣ふ姿をうをくく人の門ふ立ぞのを誰ゆ文武文勇士
とのうんやかぞりの理義ふ暗ぞみるゆ呂まゆの惑ひを禁るゆ狩と敦圍ども
判五八ゆく携りを放さぞそゆ只ゆ月の心のをうぞゆもりをりをの老ゆの便り
をくるをり只ゆの初孫ひとりをゆ愛ゆ殘ゆの珠爵の花とゆて憂を慰ゆうふくゆ
慰ゆ擒とせられて死をまゆぞりの大尼難を救ゆ外ゆうれやゆうーと怨ぞれば
一三も亦言葉を盡して頻りふ諫めくこざりーを矢藤五遥ゆうち笑ぞ兄の封の
如く天ざゆよ口を閉ぞくうち笑ひ朝夷ゆも紙雛でも立をくみをるまぞふ

そこらの諄言ぶり出来ぬほど有繋の判五善右衛門孫がと欲くも三箱の金をとやく出せ三千両ろ〳〵責めもせんかり〳〵と目前で巻の引道とこの世の暇取さえ後活さえ後生死さえ人金との商量奚の道とやく返答せどやと弱目よ債を未敵の廣言声泣涸む嬰児を今こそ打んと取るはせば吐嗟と驚く一三より判五ハ堪ず声を絞りくやゝ等矢藤五望の任せ哺朝夷ぬ〜千々の黄金も人一箇の命ふやうえとゝ死ハ亡ハ孫ろり子ゝ理を非よ枉く矢藤五の金と取らく無異をちゝんやよ一三厳渠が好ゝ過ぎり奥庫ろ金ゝ紅ふこりいゝ〜ゆひとゝハよ一三ゝ立ゝと立ると義秀ハ〜ろ〳〵声ろ安ゝとハ又阿爺ゝ狼狽ゝ狼狽ゝ狼狽ゝ人の命ハ天の配剤長ゝ生れ短ゝ生れ生れ〜ろ償ふ三年暮月ゝ至ゝ〜ゝ強盗のゝ死ゝるも病煩ゝ母親の懐ふ命終るゝ皆〜と脱れぬ命運ゝと悟らゝ〜ゝ絶もせん三千両の黄金より四五十斤ろ金槌棒ゝ

彼奴が為ゝ相応〜かゝ其処退ゝ〜と焦燥く右と左ゝ振拂ふ勇士の怒ふ日〜ろの剽軽風の如く褊室ゝ跳入ゝ〜と程ゝ矢藤五ハ引提ゝ小児を礫ゝ外面砕ゝ〜ろふ擲ら捨て大刀抜翳〜く義秀を寄ゝ〜ん〜と身構ゝ憐む〜嬰児ハ三間ゝ〜ろ投棄ゝ〜く前面ゝ〜ゝ沙園の乾浄房の細骨の障子を岸破ゝ突抜ゝ〜ゝ落ゝ〜ゝ義秀ゝ〜ゝ奮勇忽地十倍〜く囚家の為ゝ五逆の反賊ゝ〜ゝ子の為ゝ仇敵逃〜ゝ〜ゝ歯を切る怒の中ゝ足場を討〜く裡面陝ゝ〜ゝ廣庭ゝ追出ゝ〜ゝと席を蹴立〜く迫〜ゝ〜ゝ奮ゝ棒を推取直〜ゝ投著ゝ〜ゝ寇違ゝ〜ゝ矢藤五ハ縁ゝ〜ゝ礫ゝ打落ゝ〜ゝ起ゝ〜ゝ〜ゝを義秀ゝ大喝一声俱利加羅の短剣を見〜ゝ引抜ゝ〜ゝ刃尖ゝ〜ゝ〜ゝ欠ゝ〜ゝ〜ゝ刃の下ゝ一道の黒気忽地立升〜ゝ眼を透る左道の幼稚怪〜ゝ矢藤五ハ形ハ消ゝ〜ゝ〜ゝ原来妖術油断〜ゝ捕脱ゝ〜ゝ狡朽ゝ〜ゝ疾視詰ゝ甲斐ゝ




判官五郎
惜しむ
義秀を
哀れ

義秀當下に走り車連へ幼御わり一旦脱立さりしを追ふとも今へ及べくもなく投殺されるんとぞ子もと惜し亡骸をりともよくえだやとそ刃をもてよく難を納めて庭ふを走んとする程に一三頻りのうち騒ぎく阿三殿嘶いふせん稲向ぬしゑ搭満て氣を失ふく倒れ人くも疾本ぞ走やくとゆくれば義秀とれを敬馬をくそが侭走りかりひをを判五を起さんとつんで脈のありをを脇を抱とれ根枕堅平奴婢四五名迎駆れるりのすでも是首彼首より生く来る茶よ水と立騒だて衆皆あるを呼活ふとのとたもそのほとりふ倒臥る彼徐母へとが為るくぞも嘆声の耳ゆや入りけん忽地に吐嗟と叫びく息ぞ一三これをうけて乳母へいまぐ死ぎりけりそが侭部屋扛りて遣りく湯液を飲せよ勤らぞやとあるを汲さまる老人の指揮に従ふ奴婢両三人尾定息る件の姫母を抱起し肩ふ被て衆婢部屋へと扛りて見る混雑限りなりけりさてけれども義秀ハ慌る氣

色ろく一三ようち對ひくあるドの分ハ脈もとも絶ぐるふ似ぐれども必死ぞ症ふわくぞ曩ふ某肥の囮ゆく浮槎道人を受ふる起死定心の丹茶ありてくく用ひあへりとのひく躰く腰著る茶巾龍をうち披ぐくを一粒を與ぶ一三を復根枕ふ判五を抱起さて件の茶を水ゆる共る沃だ入れ諸声ふ亦復活るどまる程に判五ハ今ぞ屋くゆれ復りて頭を擡て息を吻れ潛然として義秀をえ久れば涙ふりのをのひあるを一三ゆるを薦る素湯を受ひてゆるく一口飲く息を吻れ嘶朝夷ぬ一恩愛知情の爭くもるく孫ゆ枉死ふ四月を涙く氣を喪ひ女々しくりのそと挾せ入れんゆるりよふ恥れるるゆ一朝の歎ふよわくぞ去歳の弥生の起行を二ケ月の別れぞ思ひ一のを約束の日数歴れど音耗ゆく彼友達のとふより大くるるぬ罪人とのひ立られくさらまぞ奈られゆひるその折小松のほとりを一三とのふあひるぞく友達に義を立るとそハ

立も去りあへぞその比より、下野なる由縁の人ハ來ませども、おん身ハ何処にあり
ぞとも知るよしなけれバ、友鶴がまてども來らぬ身を、いとゞしく心細さを親甲斐に慰め
幾ゝ慰めて、慰めかねし姨捨の月ならなくに影膳も果しなれすぞ日数歴て待どし
それハ長月のその九日に友鶴が産出せし女の子ハ、母ハさもあれ子ハ健やかに肥立につけても
男児なればとひがひきし、とかれやせん欲しけくもなき姫松ハ、つまづ使に誇らん花もまて、そ
かりきと思れをこゝに苦に病むを老婆わろ共に否さなるゝ、それ世の中に任せぬものを
子宝なるを女の子とて棄られんや。素性を推せバ和田殿のおん孫女なるものを、久
遠さのありかりぬべしとて、母の名をかくとりて田鶴媛と呼ん名つけくる。五十日よ百
日と祝義の産屋、艱ひおかいもなく、妳母をえらみて字育せ、年代の外祖父母が
舐る抱なる宿るなく、漫ろにつく杖も忘れて、年ハ老れ竹のうれしさ、しかるに女児の
病著、薬餌の験もあらで、壬の年立春まで少しぬ人を松も七日の門過ぐ、今茲

正月の下浣三日ぬしの主君と聞えし吉見殿より玉梓の使ハ來つ、刀劒みちの
くなるこれ彼とかとも定かに報られし、空憑めなる人のうへ、おん身の在処、彼地にも
あらずとのことへなりくに聞くねに弥ますます歎きハ、いとゞ厚氷とけぬ憾も日の光
やがてなく旅へ冤屈の罪科、友達共侶許されつ、みかと官府にあるよりまからず再
徇も知されて、そのうちに飲めの聊憂を慰めても、おん身の信ハあと田鋤く二月
三月に至りてハ、友鶴が只日の増しとさまでく妳が必死の大病、夢彼うつゝ声立て
泣つ魘るゝ譫語にもあハれおん身のうへなりたりや、萬里を隔つとも定かに在処を
報られく信もあらバ、かくまでにはひ労るゝにもあらん、何尽しぐる賣卜巫神に
佛に願言も、おん身が往方のしれよかしかしとハ知らぬ今般にも立入り来る善
なれ顔ハすがりんせてもあらバ、生を起し死を回さ、女児が為に仙丹奇方、老耆婆扁
鵲の療治にもまさるべきものなど、及ばぬまでに祷ぐハ親の愚痴、妄想花はさきなる。

閑ぬ中に世に春ゐぐりつゞ宿に秋の寤寐の心地して夜の目もあはぬ老夫婦が看病勤りいくばくの心つくせ憂苦労いかでか察し奉らんかくて春過ぎ夏に来て死天の田長を呼ぶ鳥の声聞くごとに氣ふかる比も四月十八日鮮明の月も西に没るその曉に友鶴に跡の後のひるを俯向膝に涙の雨と降そゝぐを掬拭ひ鼻うちかむその曉に友鶴に睡るごとく息絶えその先の霄に白雲の中に田鶴嬢久後にそれとなく〳〵ふの人送りて年波も稍よくせの人〳〵もらふくだくの孝行も盡さぬ去歳より殊に人ちゝねを思せなりくそを慰るよりもなく後の歎を置土産に逝てくらぬ別路とうるうとの悲しきことのかれ〳〵言葉に耳に送り目に見る面影ちゝの子を恋るよりねども田舎に稀なる美目風俗なる抱に織績ぐ女子の己に拷食新四維の琴も今様のうくひ抱え妙なり紀ゝとく浮るものなく親を墓に夫をとりに心操さく縹致さく人並こま

勝れても可惜齢の長らゑ年老る親のけるる子をし送しく死天の旅枕廻向も逆縁に生を抱ふ携りる老妻が數れも夢の夢友鶴が初七日の墓参りの久さりつゞ妻に平中ゆく倒れ伏に抱ゆるのを病と絶に七日に巫針灸茱餌の驗もなく五月二日に対まるくうとに月ごろの憂苦心労蘊積て氣を塞ぐ心神裏に衰果て救ひ紀に至れる老る婦人のヨメうとと醫師いちぐ〳〵りける某既に六十に近う暮るゝとは齢りて四月五月とうち續く只十四日の程ゆく女児を喪ひ妻に後れて残る孫の田鶴嬢のを心地煩ちくに日も渠を入れば病癒り抱ゆるに紀久ゆも渠を抱けば秋心を忘れてきのふの如と慰めを又只ちん子の如く強盜のまに擒れをうつ救つぐ擲殺さるも天命ありとく哀まぐに猛〳〵とゆとも非情に似う殊更けの友鶴が四十九日の餅配り又亡妻の五七の追薦地藏尊寺に布施齎しく法経讀経の

朝廻向久さま人の命を助けく陰徳ゑくんとゆ鄙語よの鵰の喙みる
齟齬やく禍とゑり危窮を救れても孫を殺ゝ何わゝせんゆゑ友鶴ハ
おん身ゞ妻まれ側室まれ初を推せゞ恩義あるおん身ゞ徐母の子ゑゝぞや襁
褓の中より養ひ取ゑる五倫ゆ義理ハあゝぎとも一つとうゑる妹伏よゆゝゞ。
されゞそれ友鶴ゞおん身を恋も慕ひハ實の親ゆも孝ゝ負ゑりその故ゑゝ
ぞも戒名を妙孝至貞とつけゝれゝハ自然ゆ稱ゆ名詮自性かくまゞゑゞ嗚呼
ゑゝくて釈迦ゆ法向孔子ゆ講書あゞ奚ゑゞ死とゑゞゝゝゆゆゞ胷の鬱や
曚やをゑゝくゑゞゆ繰久くゝゑり返くゝもゆゝゝゆゆゞ絶ゆ一人の王緒ゞゞ兄ゞゝゑ
ゆ形ゝゑゝ猛ゝもゑゆゆゑゝものを心つよくと憾のゑゞゝ愚痴ゝ凝ゝゝゑる老
人の涙ゆ鼻をつまゝゝ歎ハ果くゑりけり理り逼ゑる哀傷悲泣を奴婢
ゆハん皆くゆ慌ざりけんゝの徒ゆ退ゝを一三ハゑ側ゆゑり皆くと毎ゑ嗟歎

ゑゝく又義秀ゑゝち對ハ阿三との何と皆れくゞ稲向大人の怨言ハみゑ実情の
隨ふくとおん身を憎くゝそゆゆゝゞ今ゆゝゝその甲斐なけまゞも吾倚ゞ小松ゞゆく
とゝ霊妻時もゆゑゑ立よゝゞ先ゆゆ妻子ゆ拘を思ゞゞ去歳ゑり今茲きのゑゞ。
鳴の翼ゆ一喜の音つれもゑく過されくゝゝ友達ゆよゝゝ人ゞとも妻子ゆハのと強
面ゑゞゞゆ況けゆ亦與兒を矢藤五奴ゆ捉られく折涙ゞ所望の金をゞと賺ゞ
小児をゞゑり復くゝ後ゆ殺ゆとも遅ゝゝゆゆゞ慈ゑを早ゞゞ子を喪れ又矢藤五を
好き洩ゞくゝゝゝれゞ無謀の勇ゆ似ゑり定めて意味のゑゑゞ狡いと思ゑゞ我
儂ゞ匂月ゆハゆちぬとゑゞゑ田鶴とゝハ殤子ゞ間より間ゑゝくゞとも友鶴とゝ
ゞゞゆ忠ゑゞくハおん身の好きの男児まれ女の子まれ又生まもせんを女児ひとり孫
ひとりのこれ彼共ゆ先ゞゞくゝ稲向大人の心の哀を世ゆ湯ゑゞゞゞゞゞゆゆゆゞ。
ゑゞゞ人も又ゑゑゑゞゞくゝ七七四十九日ゆハ魂魄天ゆ飯ゑとゝくゞ友鶴とゝ魂魄ハ

おん身の帰郷より引されてけふを限りふ屋の棟を立もゐ去りてかくりもせー。
とゆふ愚痴狂とのひうけて背向ゆうりて目を拭へば判五ゐとど堪ゐて伏
沈まつ泣ゐけり義秀ハ初より論じ爭ふ気色ゐく只ゆを又ゑ頭を垂れて
いるゐ隨ゐ来ーくをゆふ就てゆび胸ゐ浮むい養母巴の尼の別ーとゑふ蔓が
往方をおりひるくる言の葉の甲斐ゐゑ涙ぞよりゐ果ー今の歎ゑと又後の母の
歎ゑの身ひとつゐ汲ゐく深ゑ因愛情義心ハゐるゐ悲ゐの泣ぬハ泣ゐ弥
ゆゑどゐもゆひうーく貌を更め両位の翁の怨の趣みゐ理りふ似ゑれどゐゑハ
人欲ゐの私のゐ友鶴が産のゆゆゐ赤著のゆゆとゐハ暴義ゐ馬艱標吉郎継忠ゐ
待人ゆくゐ況今ゐのゐゑ跡ゐ立入り来つる本意ゐゐハ山豆各位と異ゐゐんや
義秀も亦眼横り自畢直けるゐゐ七情ありゐ只衆人と異ゐるゐゐハ信義を重
しとゐるをゐゐ竊ふ歎ゑく悔ゐゑのゐかくゐゐ賢ゐもゐ翁ゐゐ各位を窘ゐふ

似ゑれども公道人情両ゐゐゐ全く考ゐゑゐを述ゐく迷を釋んゆゐ抑一隔歳
義秀ゐ婚姻を推辞ーハ友鶴ハゐふ養母の子ゐ且ゐの已前下野ゐ吉見冠者
井平ゐと約金ゐ義を結びゐく艱難迄ふ相救ゐと許せーゐのあれゐ然ゐを
各位聽ゐーゐ栞ゐハ妹母ゐ養母の女児を娶ゐるとゐ養子合せとゐゐあり一所
不住の義をりゐくり妻を娶ゐ意ゐくハ枉ゐ側室ゐせられとゐ友鶴をりゐ
妻せられゐゐ小松の母とりゐく一三阿爺ゐ遭ーとゐゐゐ立もゐゐ当時
義秀寃屈の罪あり勅ゐ立ゐゐ各位を連係せん且早件の両友ゐ素ゐ會ん
とゐゐ故ゐかくゐ四國九州をゐ巡りゐ一ゐびも雁の翅をゐあざりーハ脚力郵書の
便宜を得ゐ且冠者井平ゐゐ環りあるゐゐ妻子ゐ信せんとゐゐと恥ーく
ゐゐ余ゐとの春幸ひふ寃屈の罪の釋ーゐ更ゐ東へ杖をかくゐ稍華洛まゐ
来つる比陸奥信夫の戦ひゐえゐ吉見冠者戔邦夫婦ゐ経任ゐ為擒ゐゐれゐ

平泉の枡よりと巷談既ふ定らんそあとに某あり巷人今岩神ふ立よりて更ふ
陸奥ふ赴ふ轍魚の危窮を拯ひて義をんて世ざるハ男士よあらじとハ人ふ
けるを夜を日ふ継て先陸奥ふ馳ぐう冠者夫婦を救ひ出て経任を討捕う然
けれども功ふ拵らぬ大将多田藏人が鎌倉へ送ぐ系ぐんとそ只管涙落しぐも袖
振拂て彼処を退ぐて地を投て急ぐ程ふ箇様ぐこのるふよう越後の津川の旅
宿ふて猛ふ毒瘡の苦しより病煩ふて十餘日ハ人の外ふ日を過しつ病ふやく
命心しハ図ぐく彼処をぐち出ぐ亦復いぐ路ぐ西を把し宿りと約めてけふ立ぐ
つぐ宿の檐下の松ハうとりねぐ待て寄し吾妹子も姑も世ぐるぐ人今法の名ぐあぐ選
ぐる昔語とぐりしるぐ皆是天ふ命ぐるぐるそれのぐぐぐ生れてようぐの容貌をよくも
又ぐ人ハ残賊の礫ふ打れぐ命を隕せしぐの落命を哀ぐぐんやぐ義秀が
不幸ふして救ふようもるぐのぐとハ亦いぐふと問れん狩彼矢藤五ハ経任の四天王

とぐれぐる驍勇の賊将ぐ先見遠謀ふぐて経任が秘藏せし幻術の書を竊ぐて
ぐ逐電ぐしとぐ人ハ扉ふ翼を添ぐるの術あり緩彼奴が望ふ任て許ぐの金を
取ぐぐるとも賊情ハ信義ふ疎し一撃殺されぐる等類の怨ぐぐ復ぐんぐふ金を
奪ふ小児を屠ぐぐの術をりて逃去ぐハこれ盗ふ糧を窃し雙ふ刃を與ぐる世の胡
虜とぐぐぐんやぐふもかくも田鶴媛が命運の竭ぐ所亦のふとのぐぐぐ今を
矢藤五幻術をりて輒く脱れ去りしりとも某が世ふ在ぐ限り往方を尋ぐ撃殺しく
四方ふのるふ毒を殺ぐ女児ハるふ怨を報ハん今各位の悔吝送恨ハ人情の志ふ所
これ衆人のぐぐる義秀が恩愛より信義を以車しとぐこの故ふ造次轉沛みる公
道ふ由ぐるのぐぐよりや忠義の狗ぐ多ぐとも恩愛の奴ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ婚姻を推
辞しもこの故ふ強られしぐより今更ふ憂目をも忍ぐ怨と受ぐりぐを尋ぐ非とせられ
ぐハ打も敲もぐぐぐひぐ聊も厭ひぐぐと弊ぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐぐ

ゑゝび怨とぼひとゝく感嘆ゑさりる中ゐ判五ハ慚愧ゑ堪ぢ汗ばる額を推拭ぢ朝夷
ぬゝよ許ゝゐ我儂不才の俗人ゑれば賢良交遊の仏をゑゝぢ恨ゑすぢ死のゑ慎ゑこゑまゝた
ゐをゑりゝよゝゐゑ思知の諺言ふゑゑさりける時を移ゝさ田鶴媛ゑ亡骸をさり飲ん
とゐぢさりゝハ櫃を抱ゑて珠を送れゝ掖ゐゐ似ゑりけりゐの前栽ゐる乾浄房ハ和君
ゐゐゑゝれるゑゝぢゑ死の持仏堂之本尊ハ恵心の作佛先祖昭穆の美位ハさゝとゝゐ妻
及友鶴ホが新位牌ゐ建てみゑ彼処よゐゐ朝夕の香華燈明一日ゐ間断ゑ在家
ゑゝゝの選佛場ゐ之命終りゝ田鶴媛ハ定業ゑゑゑひハめとゐゑ一三側より百田の大人
寔よ拙ゑり鶏卵よ等ゝ死嬰児のゑさゝりのよ擲れゝれば存命ハ死ゐゐねゐ後世ゑゑ
憑ゝゝかゝんゑゝくゐ死ゑゝゑんゐゐゐゑゑとゐゑよ判五ゐ義秀ゐ身を起ゑゑとハ夜よ次の間よ
うち嘆ゑ隔亮をゑをゝゑゝくりゐゐりとゐハ誰ゑ其ハ次の巻よ解分ゑを見ゑ知ゝん。

朝夷巡嶋記全傳第六編巻之二終

文榮堂發兌文房書目

考槃餘事　明屠本畯著　東溪源謙校　白紙摺明朝綴　帙入全部四冊

題畫詩選　岡崎盧門著　全仕立全三冊

書畫皆宜　美濃氏撰輯　白紙摺明朝綴　帙入全部三冊

題畫詩刪　狩川竹窓著　全仕立全一冊

書舗　浪華心齋橋應福比第五街　前川源七郎　文榮堂